

感性を育む和学講座



暦とは？

「暦」とは、時間の流れを、日、週、月、年で表したものです。さらに、月齢、日の出、日の入りや吉凶、曜日なども含みます。万人が正しい日数を知るために、暦が作られたのです。

暦の歴史は古く、紀元前から用いられています。紀元前 8 世紀から3世紀にかけて、現代の私たちが使用している暦の源が確立しています。

古代エジプトではナイル川の氾濫が、周期的に起こり、それがおおいぬ座のシリウス星が関係していることに気づき、その周期をもとに暦が作られました。ゆえに古代エジプトの太陽暦はシリウス暦とも呼ばれます。

太陽と月

暦には、大きく分けると「太陽暦」と「太陰暦」があります。

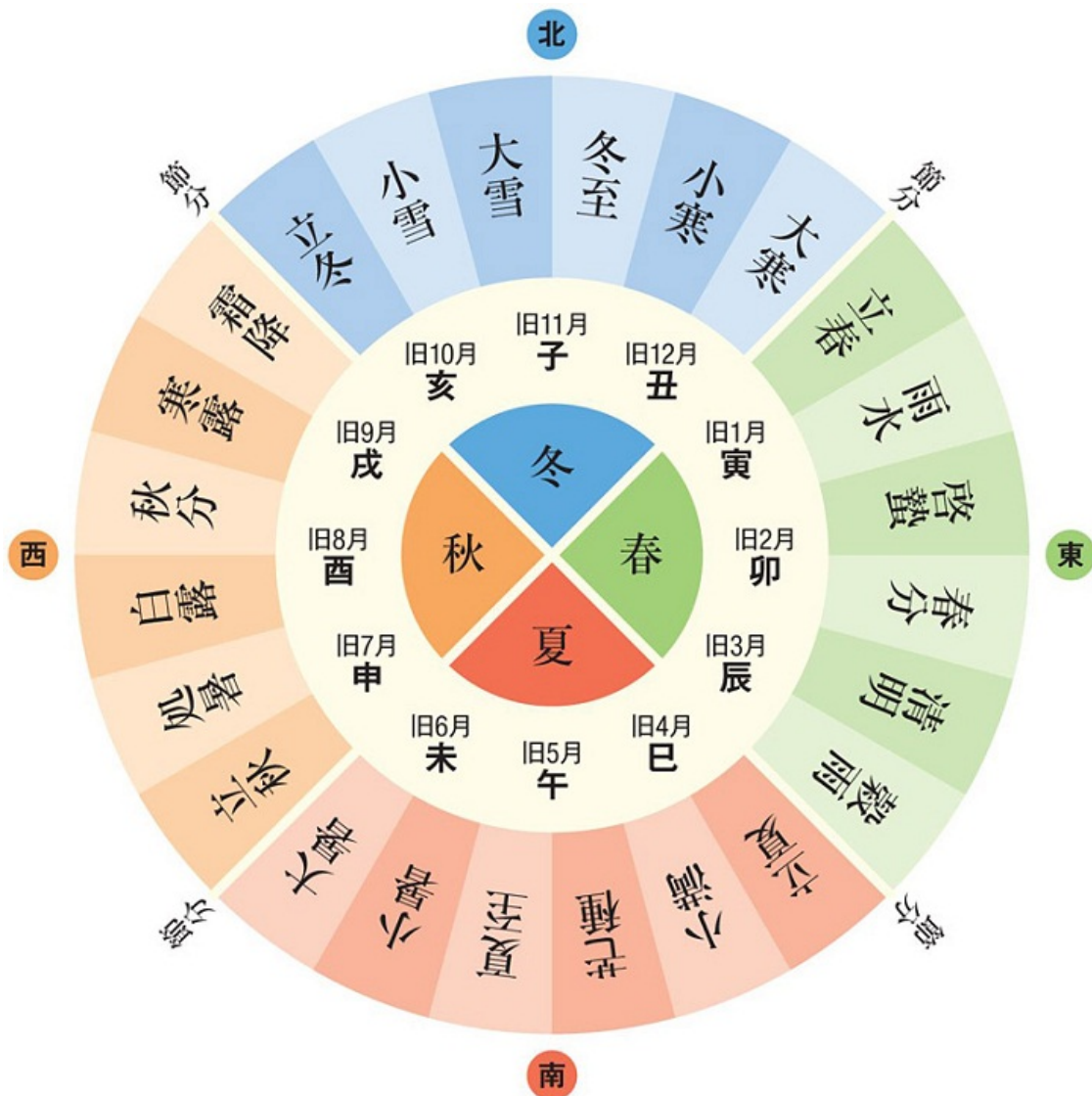
「太陽暦」は太陽の動きを軸にして構成されており、「太陰暦」は月の満ち欠けが基本となるのです。

日本は明治五年まで「太陰太陽暦」でした。太陰太陽暦とは、月の満ち欠けを軸とする太陰暦を中心にしています。ただし、一年が三五四日となり、太陽暦の三六五日と十一日

も差ができてしまいます。そこで、閏月を入れます。閏月は十九年に七回の割合で入れられました。閏月が入る年は十三か月で一年となるのです。

例えば、七月と閏七月というように、一年の間に七月が二回存在するのが閏月です。

また、同時に二十四節気も考え出されています。



農業のためには正しく細かく季節を知る必要があったのです。

二十四節気とは、太陽の黄道上での動きを二十四等分したものです。太陽が最も高い位置にある日を夏至、最も低い位置にあるのが冬至と決め、それらの中間時点を春分、秋分とします。そして季節を春夏秋冬に分け、ひとつの季節を六等分しています。春なら立春・

雨水が初春、啓蟄・春分が仲春、清明・穀雨が晩春となります。

それぞれに「節気」と「中気」があります。

例えば、新暦の二月四日頃は立春で正月節(気)。新暦の二月二十日頃は雨水で正月中(気)となりますが、三十三か月ほどたつと「中気」が入らない月が出てくるので、この月を閏月とします。

二十四節気の言葉は季節感を良く表しており、情緒豊かです。

さらに、もっと細かく具体的に区切ったのが七十二候です。七十二候は二十四節気をそれぞれ三つに分け五日ごとに区切られ、一年を七十二等分しています。ただ、中国華北地方で誕生しているので、そのままでは日本の風土とは合いません。ゆえに日本独自に変更されています。それも時代につれて何度も変更されています。現在の七十二候は明治七年に出された「略本暦」が使われることが多いようです。

日本の改暦

明治に開国すると暦を太陰太陽暦から、西欧に合わせて太陽暦に変えられました。

もともとそれまでも、暦は何度も修正されているのですが、それは太陰太陽暦の中で修正されていたのです。太陰太陽暦が人々の暮らしと密接に関わっていました。五節供や盆正月、祭りなども旧暦と云われる「太陰太陽暦」に基づいて行われていたのです。宮中から庶民にいたるまでの人々の暮らしを彩っていたのです。

明治五年十一月九日に、政府から、改暦によりその年の十二月三日を明治六年一月一日とするとの詔書が出されたのですから。国民はかなり当惑したでしょう。一年で一番忙しい師走がなくなるのです。

商人は大いに慌てたと想像できます。

一方で当時は現代のように電話、メールなど無いのですから、国民全員が改暦を認識するまではかなり時間を要したと推察できます。

この改暦は、明治政府の懐事情によるものだとされています。外交で支出費用がかさんでいたのです。役人は月給制になっていたので、十二月が無くなると一ヶ月分の給料を支払わなくて済みます。おまけに、旧暦なら翌年は一年が十三ヶ月ありますが、新暦になると十二ヶ月です。一年で二ヶ月分の給料を節約できるということです。

日本で始めて採用された暦は元嘉暦です。時期は持統天皇時代でした。では、それまでに暦は存在していなかったのかというと、そうともいえません。確かに「魏志倭人伝」には日本人について「農耕時期を知らない人々」と揶揄されているようですが、縄文時代に、日時計として使用されていたと云われているストーンサークル(環状列石)が

残っています。古くから月の動きと太陽の動きに周期的なものを読み取り、時間の経過を感じ取っていたのでしょう。

明治に新暦、現代の太陽暦であるグレリオ暦に変更されてからは、日本の年中行事は季節に合わなくなってきました。なので、江戸時代に制定された五節供も廃止されているのです。

時の記念日

「時の記念日」は6月10日です。

天智天皇10年4月25日（グレリオ暦671年6月10日）、日本で初めて時計により時報が打たれたことを記念して、大正9年に制定されました。

この時の時計は、「漏刻（ろうこく）」と呼ばれる水時計でした。

「時の記念日」の制定には、当時欧米の人たちから「日本人は時間の感覚に乏しい」とみられていたので、時間の感覚を身に付け、規律正しい生活を習慣とするように啓発の意味があったようです。



明治の開国以前までは、日本人は時間にルーズだったなんて、今では信じられませんね。
ルーズというより、現代とは感覚が違ったのでしょうか。
江戸時代は、お寺の鐘が時報でした。



江戸時代までの時の感覚はとてもおおざっぱでした。「不定時法」でお寺の鐘はなっていました。不定時法とは、日の出のおよそ30分前を「明け六つ」日没のおよそ30分後を「暮れ六つ」として、その間を昼夜それぞれ六等分していました。その単位を「刻」としており、一刻は約2時間ですが、昼と夜、季節によっても長さは違ってきました。

時刻の数え方には、十二支と四から九までの数字が使われていました。数字は九から四まで下るとまた九に戻ります。この数え方が落語の「時そば」と関連しているのです。

幕末の頃、日本を訪れた欧米人は日本人の時間の感覚がルーズということに嘆いている記録が残されています。

1857年から2年間、長崎海軍伝習書教官として幕臣に、西洋式の海軍教育を伝えたウィレム・カッテンディーグというオランダ海軍の技師が著書「長崎海軍伝習所の日々（日本滞在記抄）」において「日本人の悠長さといったら呆れるくらいだ」「日本人は無茶に丁寧で、謙譲ではあるが、色々の点で失望させられる」と嘆いています。

一方西欧ではキリスト教の宗教行事の規定が厳しく定められていたので、祈りの時間を守るためには正確な時間を知る必要がありました。13世紀には「分」「秒」が生み出されています。

500年間「分」「秒」単位で時間を考える西欧人と、約2時間の「一刻」単位で時刻を考える日本人とは大きな感覚の相違があります。

その日本人が、「分」「秒」単位の感覚を身に付けるきっかけは「鉄道」でした。明治5年(1872年)に日本で初めて新橋、横浜間に鉄道が通ります。1905年に、一人のアメリカ人が日本に鉄道機関車の売り込みのために来日し、日本中を回った日記には、日本の鉄道が遅れて困るとか、日本人が時間にルーズという記録はないそうです。わずか30年ほどで、何百年もの間身についていた時間感覚は、西欧なみに、いえそれ以上にきっちりしたのです。その要因のなったのが「鉄道」と「軍隊」「学校」だったと考えられます。

